

Jean-Claude Bonnet,
Naissance du Panthéon. Essai sur le culte des grands hommes,

Fayard, L'ESPRIT DE LA CITÉ, 1998.

桑瀬章二郎

出版からすでに2年を経た書物をあえてここで取り上げるのは、この書物が18世紀フランスの文化社会の理解にある新しい視点を導入する重要な研究であるからである。そしてこの特殊な時代を限定的に扱いつつも、近代フランスの文化全体へ新たな角度から接近を試みる希有な作品であるからである。

新しい視点、と述べたが、しかしそれはジャン＝クロード・ボネの読者にとってはすでに馴染み深い視点でもある。1976年に *Poétique* に発表された記念すべき同名の論文「パンテオンの誕生」以来、著者は長年にわたりそこで展開された主題—18世紀における「偉人崇拜」—について考察を深めてきたが、その間に彼の研究が各方面に及ぼした影響ははかりしれない。18世紀における文字どおりの偉人ヴォルテールやルソーといった作家についての研究は言うまでもないが、伝記文学や自伝文学研究、それからピエール・ノラが編集した『記憶の場所』のような歴史家たちの重要な仕事においてもその影響は明らかである。ボネ自身の仕事もまたデイドロ、スタール夫人のような作家、そして頌辞という文学ジャンルの生成や革命崇拜へと広がりを見せ、扱われるテクストも、有名作家の代表作からメルシエのような作家の今日では忘れ去られた作品、さらには革命期の定期刊行物と多岐にわたっている。こうした研究を知る者にとって、本書は新たな視座の導入というよりもむしろ、これまでのボネの研究ならびにそれに影響を受けた研究の総括といった印象を与えることであろう。またこれまでのボネの研究を知らない読者にとっては、本書の主題「偉人崇拜」は、一見したところ、極めて凡庸な主題であるかにも見える。18世紀において作家が文化社会に君臨したことは多くの歴史家によって語られてきたし、革命期の指導者をめぐる崇拜についても詳しい研究がなされてきた。しかしながら本書は「偉人崇拜」という主題をめぐる、おそらくは初めての体系的研究であり、ボネ自身がこれまで調査してきたさまざまな現象を「パンテオンの歴史」として大きなひとつの流れとしてまとめることによって、単なる総括にとどまらず、来るべき研究の出発点ともなりうる視座を提示することに成功している。

本書は四部からなる。18世紀の「偉人崇拜」の基底ともいうべき心性の分析がなされる第一部は、「家族の父から国民の父へ」「栄光の変貌」と題された二章によって構成されている。それぞれの章において著者は、父親像と偉人（英雄）像の変遷を概観している。プレヴォヤデイドロの

作品を例にとり、当時の作家における父親のイメージの重要性を明らかにした後、同様の観点から、18世紀以前には主に戦争や地位や生まれに由来した「栄光」が、時代とともに、理性的な統治や能力を持った平和主義的行為へと対象を変えることが示される。こうした変化が、文学者を対象とする偉人崇拜というこの世紀特有の文化的現象の基盤であるとされるのである。

この第一部は、本書の中で最も独創的な歴史的な分析が展開される第二部を準備している。その第二部は四つの章からなり、偉人崇拜を理解する上で鍵となる頌辞 (éloge) というジャンルに様々な角度から光が当てられる。18世紀以前に一般的であった追悼演説に変わって頌辞という言説が当時の知識人達に熱烈に支持されたのはなぜか。このジャンルはいかなる形式的、イデオロギー的特徴を持つのか。1759年のアカデミーによる雄弁賞の設定から革命前夜までそれはいかに進化していったのか。こうした問いに基づいて議論が進められる。中でもボネが注目するのはアントワヌ＝レオナル・トマ (1732-1785) という今日では完全に忘れ去られてしまった作家である。1759年から1765年まで立て続けにアカデミー雄弁賞を取り、天才的な頌辞作者として同時代に確固たる名声を築き、「フランスのプルタルコス」と呼ばれたこの作家が残したテキスト (特に1773年出版の、頌辞というジャンルの歴史を考察した『頌辞試論』) を年代順に丹念に読みとくことによって、ボネは頌辞が担うことになった政治的イデオロギー的機能を明らかにしていく。教会権力から自由ではありえなかった追悼演説に対し、頌辞という言説は名誉や栄光の審判者としての役割を作家に付与するところになるが、さらに作家は国民の記憶を定めるばかりではなく自らその崇拜の対象となり、その象徴権力を増大させていく。その過程が頌辞ジャンルの成功という観点から巧みに分析されるのである。こうした偉人崇拜の形成は、他の芸術ジャンルにおいても明らかであり、著者は第二部の最後で彫刻芸術や演劇といった領域にも分析を進め、自説をより説得的なものとしている。

「大作家と記憶の神殿」と題された第三部は、18世紀フランスの大作家の例としてヴォルテールとルソー、それからデイドロ (当時彼はまだ「大作家」の地位を得ていなかった) の三人を中心に、彼らを対象とした具体的な崇拜についての考察、そして偉人をめぐる彼ら自身の考察が分析される。すなわち、ここまで論じられてきた偉人崇拜が、フランス啓蒙期の代表的作家の作品と生涯にどのような形で見いだされるかが問題となるのである。崇拜の高まりによって一部の作家が「偉人」として君臨し始めると、確固たる文学的社会的地位を手に入れた作家と、「体制」からこぼれ落ちた作家の間に亀裂がはしり、強力な象徴権力と政治力を手にした「哲学者」と「反哲学者」との闘争が激化する。偉人崇拜は作家の公的イメージをめぐる闘争としての側面を強め、大作家は公衆が抱く自らのイメージに取り付かれ苦悶する。好奇にみちた大衆の視線に押しつぶされそうになりながら、その公衆に向けて自伝的著作を準備し、真なる唯一の自己イメージを後世へ伝えようとするルソー。常に公衆の好奇の眼に自らをさらし、作家という役割を演じ、偉人として文化社会に君臨し続けたヴォルテール。今日彼の代表作とみなされている著作を生前にはあらかず、後世における栄光を信じて疑わなかったデイドロ。偉人崇拜に対する反応は様々であるが、作家としての公的イメージへの配慮という点において彼らの反応は共通している。

ここまで18世紀におけるその生成過程が明らかにされた偉人崇拜が、政治的ヒーローをめぐる

革命期の熱狂的な崇拜と密接に関連しているというのがボネの主張である。パンテオンは18世紀を通じて夢みられた記憶の神殿の具現化であり、偉人崇拜はようやくその記念建造物を産み出すのである。革命期が扱われる第四部では、この政治的激動の時期に、公衆によって求められる祖国の偉人像がめまぐるしく変化していく様が描かれる。1780年代に熱狂的な支持を集めたネッケルは1789年にはすでに世論の支持を完全に失っており、崇拜は典型的な革命期のヒーローであるミラボーへとその対象を変えていく。そして混沌とした革命期を象徴するかのようマラー崇拜が起こる。ヴォルテールやルソーは革命前夜と同様の崇拜を受け続けるが、一般に文学者の威光は失われ、ジャーナリストや代議士が偉人として君臨し、パンテオンの住人となる。政治的ヒーローをめぐる崇拜は、しかしながら、めまぐるしく変化する政治状況の中であって、はかなく、危ういものとなる。事実ミラボーやマラーは、その埋葬から間をおかずしてパンテオンを去ることになるのである。そしてこうした出来事は、パンテオンという制度それ自体の有効性について議論を生む。祖国の偉人の眠る神聖な場所として建てられたパンテオンは早くもその政治的役割——偉人を通して空想的に国民的統一を成立させるという役割を果たせなくなるのである。偉人崇拜それ自体はというと、以前のように国民全体を包み込む熱狂として存在しえなくなるが、形を変え、スタール夫人のような作家に受け継がれていく。

このように本書は18世紀フランスにおける偉人崇拜という主題について、バランスのよい全体像を提示しえている。はじめに述べたように、本書の大部分はボネ自身のこれまでの様々な研究に基づいているので、それらの研究のさらなる深化を期待した読者はいささか当惑するかもしれない。トマと頌辞ジャンルの重要性は1976年の論文ですでに強調されていたし、ファルコネとの論争書簡、『セネカ論』を中心としたデイドロの著作は同様の観点から繰り返し分析されてきた。また革命期の文学や政治的ヒーローをめぐる様々な場所で詳細な議論がなされてきた。そうした点について、本書にはあっと驚くような新しい指摘は見いだせない。また初めてボネの研究に触れる読者には、いくつかの箇所でも議論が幾分型にはまったものとなっているように映るかもしれない。例えばわれわれは、デイドロにおける「後世」がどれほど複雑な問題であるかを理解しているし、革命期のルソー崇拜がどのような複雑な政治的背景のもとに成立したかを知っているが、本書ではそうした問いに対し、斬新な解釈は何一つ提出されない。しかしそうした複雑な問題について立ち入った議論がなされないというのは本書の欠点ではない。全編を通じて、18世紀における偉人崇拜の問題についての全体像を提示するというボネの意図は明らかであり、その点に関して本書は見事に成功している。マラー崇拜や革命期の文学について（ボネは二つの重要な共同研究を成功させている、*La Mort de Marat*, 1986, *La Carmagnole des Muses*, 1988）、あるいは定期刊行物の言説について（彼は長年 CNRS で「ジャーナリズムと世論」についての研究プログラムを指揮してきた）いくらでも議論を展開できるであろうが、そうした点に関しては最小限の言及ですまされ、逆にこれまで欠落していた18世紀前期についての考察が深められている。

このようにして提示された18世紀における偉人崇拜という観点は、この時期の文化社会を理解するための新たな視座となっている。本書ではしばしば、よく知られたエピソード（例えばディ

ドロと父の関係、スタール夫人とネッケル夫妻の奇妙な三角関係)が取り上げられるが、本書が辿る歴史の中に見事に組み込まれることによって新たな輝きを放っている。新たな解釈を提示することができたという自負からであろうか、あるいは出版事情によるのでであろうか、本書では隣接する研究分野に対する言及がほとんどない。文学界における様々な闘争が問題になる際、「文学場」の概念が利用されることはないし、公衆や世論の形成が論じられる時もハーバーマスやアナル派の歴史家の仕事に言及がなされることはない。また「どん底のルソーたち」が生き生きと描かれながらダントンの名前が引かれることはないし、革命前夜にアカデミーが置かれていた歴史的状況が分析される際、わずかにロシュの研究が紹介されるだけである。全編が自らの研究に対する絶対的な自信によって貫かれているかにみえる。そして、すべての重要な研究がそうであるように、本書もまた来るべき様々な研究を示唆していると言える。例えばフランスの国民意識の形成やトクヴィルのいう「文人政治家」の誕生について考える際、本書は極めて興味深い視点を与えてくれることであろう。あるいは、啓蒙思想と革命文化の連続性(もしくは非連続性)という文化史家によって繰り返し論じられた問いを、再び取り上げることを可能にするであろう。また、ボネ自信が強調するように、偉人崇拜は19世紀や20世紀においても存在する現象なのであるから、その歴史の変遷をたどることも可能になるだろう。偉人崇拜はフランス近代において、われわれが考えているよりはるかに重要な現象なのである。